研究ノート

「中国禹跡図2022年版」の意義とその検討

植　村　善　博

〔抄　録〕

2022年４月に紹興市から出版された「中国禹跡図2022年版」は禹跡323件を示した唯一の禹王遺跡分布図である。その意義と内容を紹介するとともに日本の禹王遺跡との比較をおこなった。

禹跡の類型として寺廟が最多で39％と約４割を占め、次いで山嶺および河湖、禹地名を一括して33％に達する。一方、石碑類は３％にすぎず、日本の約７割を占める状況と大きく異なる。遺跡数からみると四川地区、河南・山西地区、浙江地区の３大集中地区が存在する。遺跡年代では、先秦・秦期のものが52％、明・清代のものが26％を占め、この２時期が遺跡設置の集中期である。出生、婚姻、立国、治水、墓葬のライフサイクルによる遺跡の分類によると、出生は四川と河南、婚姻は浙江、河南と重慶、立国は浙江、安徽と河南、治水は黄河および長江のほぼ全域と山西、墓葬は浙江のみに分布する。河南・山西および浙江は治水のほか婚姻、立国の遺跡が複合する集中地区を形成している。

キーワード　中国禹跡図、類型、禹王遺跡、年代、ライフサイクル

１．はじめに

2022年４月に「中国禹跡図2022年版」が浙江省紹興市から出版された(1)。横110cm×縦80cmの大判で両面カラー印刷、表面は縮尺560万分の１中国レリーフ図に323件の禹跡の位置、番号と名称および地区別の類型と件数、国保遺跡名と流域別件数の統計表が記されている（図１）。裏面は中国禹跡一覧表で、323件について26の省・自治区・直轄市などの詳しい情報を示す。また、代表的な遺跡や拓本など40枚の写真が挿入されている。本図は紹興市鑑湖研究会が中心になり中国水利博物館と紹興市文史研究館の協力をえて編集されものであり、現時点で唯一・最新の中国禹王遺跡分布図である。一方、日本では「日本禹王遺跡分布図2022年版」およ

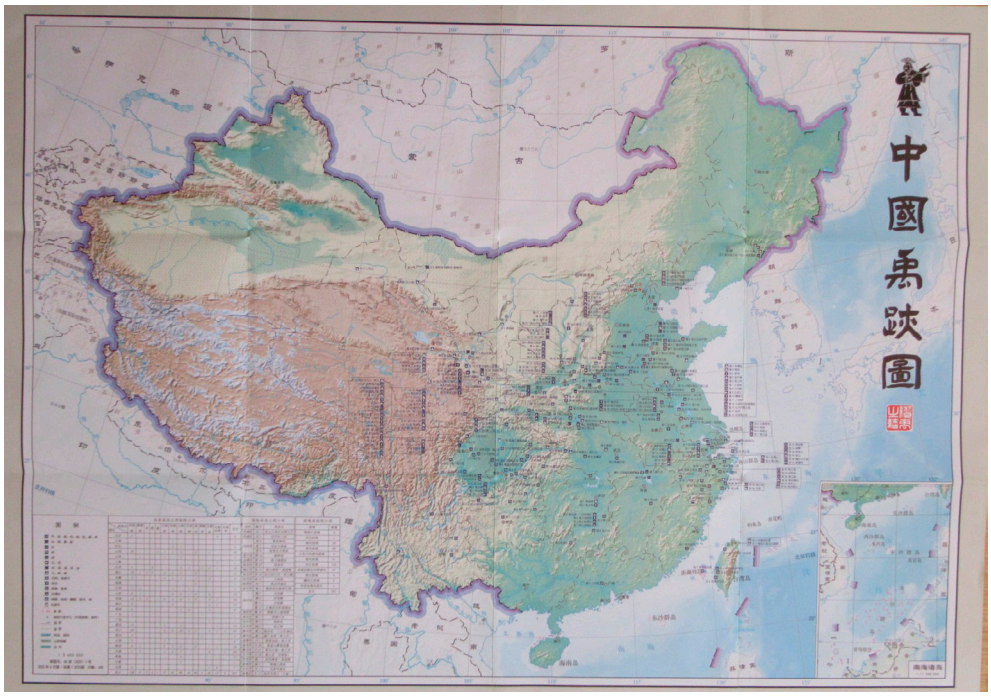


図１　中国禹跡図（2022年版）

び165件の遺跡の特徴を記載した『日本禹王事典』（2023年）を出版した[(2)]。

本稿では、「中国禹跡図2022年版」（以後中国禹跡図と略称する）の製作経過と意義、地図情報を検討し中国における禹跡の分布と特徴を明らかにする。さらに、日本の禹王遺跡との比較について考えてみたい[(3)]。

２．編集方針と作成経過

『禹跡図編制導則』（2022）において、大禹遺跡は禹跡、その分布図は禹跡図と称するなどの定義を示し、「禹跡は史料の中で大禹治水やその他の活動、足跡伝承の記載に基づいた現在にまで残る大禹祭祀活動、記念建築物、地表露出物、碑、地名などの自然、歴史物質遺跡など」とされた[(4)]。また、中国禹跡図の編纂説明では「禹跡とは、史料にある大禹治水やその活動足跡の伝説に関する記載、現在に残る大禹祭祀活動、記念建築物、地表露出物、碑刻題刻、地名などの自然的・歴史的遺物、遺構や遺跡を指す。今回の禹跡図編纂にあたっては、主に全国重点文物保護単位と省レベル文物保護単位である関連禹跡、歴史文献中の禹跡関連記載の遺物などを重点的に収録した。資料は根拠を有することが原則で、文献調査、現場考証、調査委託などにより入手した。中国禹跡図は、正図、前言、表、写真、資料集成等５部分から成り、全国26の省、自治区、直轄市の禹跡地点323件を精選した。河川は11流域に分類した。このう

ち、不可移動文物308件、可移動文物13件、非物質文化遺産２件である。編纂にあたって全国各地の関連地域、研究者、国内外の大禹文化研究者の合意のもと、全国各地の水利、文物、文学歴史、測図の専門家多数が、『禹跡図編制導則』の規範にのっとり研究成果を結集して編纂事業を進め、2022年４月に完成した。本図が文化歴史、水利等の学術研究の一助となり、大禹文化の保護と継承のために依拠、参考となることを願う」と記す(5)。すなわち、国や省の指定文化財、歴史文献に記載された根拠を持つ歴史遺跡を中心的に取り上げたものといえる。

一方、紹興市では本図製作以前から大禹文化の保護と継承に積極的に取り組んできた。1995年中断していた大禹祭礼を56年ぶりに復活させ、2018年に「紹興禹跡図」、2019年に「浙江禹跡図」、2021年に『紹興禹跡標識導読』と研究成果を発表してきた(6)。つぎに紹興市による禹跡図作成の経過を日本の立場から振り返っておきたい。治水神・禹王研究会は2017年10月７～８日に山梨県富士川町で第６回全国禹王サミットを開催した。その際、中国から禹跡行訪問団８名が初参加した。中国水利部副主任で水利史研究所長の呂娟団長、紹興市鑑湖研究会長の邱志栄副団長、大禹研究者張均徳、紹興日報丁興根、写真家金偉国、越秀外国語学院呉鑑萍さんらのメンバーである(7)。我々はこの日のために「日本禹王遺跡分布図2017」を編集、印刷して参加者に配布した。団員との対談で中国にはこの種の分布図はあるかと尋ねた。これに最も衝撃を受けたのが邱志栄氏であったという。当時、中国に禹王遺跡分布図は存在しなかったのである。帰国後、邱氏はわれわれの遺跡分布図をモデルに地元紹興市の分布図を編集することを発議、紹興市政府を動かしその支持下2018年４月に「紹興禹跡図」を完成させた。そして、立命館大学歴史都市防災研究所と本研究会が共催した「日本の禹王遺跡と治水神・禹王信仰展」（３月16日～５月15日）に間に合わせるよう発送、「紹興禹跡図」を日本禹王遺跡分布図と並べて展示し日本初公開することができたのだった(8)。現地では紹興禹跡図が非常に好評で高く評価されたのであろう。翌2019年４月には紹興市と浙江省政府の協力のもと「浙江禹跡図」およびその詳細な解説書である『浙江禹跡図』が出版された(9)。この間、2018年４月20日に紹興市大禹陵で開かれた政府主催の公祭大禹陵典礼に治水神・禹王研究会の大脇良夫会長のほか水野浩、竹内晶子と植村が招待された。とくに、大禹廟に祀られた大禹像に日本治水神・禹王研究会として献花することができ感動した。翌21日は浙江越秀外国語学院における「中日大禹文化国際学術シンポジウム」に参加、大脇、水野、植村は研究発表（竹内による同時通訳）、中国研究者とはじめて研究交流したのだった(10)。その後、中国における大禹研究の潮流は四川省にひろがり、2019年に「汶川禹跡図」、2021年に「アバ州禹跡図」が相次いで出版されることになる(11)。一方、邱は「禹跡図は画期的な大禹文化の研究方法であり、大禹が実在する人物であるかどうか、或いはどこで治水実績をあげたかに重点を置くのではなく、大禹文化の伝播ルートや歴史伝承について、地域や類型による特徴を示すものである。禹跡図をもとに水利史、歴史地理、考古学、民俗学等様々な学科による連携が可能となる」、「大禹文化がある地域になぜ集中して生まれたのか、ある地域の歴史地理環境はどのように変遷してきたのか、大禹

文化の主流の源と伝播経路はいかなるものか、その最も核心的価値と意義は何か、などについて思考、研究することができる」と禹跡図の意義と利用価値を極めて適切に述べている[12]。

ところで、このような大禹や大禹文化の研究と顕彰が進んだ背景には中国政府が進める「中華民族の栄光ある歴史と復興」政策が深く関わっていることは間違いない。そんな中、紹興市は東アジア禹跡図の作成を目標に掲げた。そして、2021年４月その始動式を開き本会にも参加招請状が出された。ついで同年６月には東アジア禹跡図作成に協力を依頼する紹興市政府文書が届けられたのである。９月には浙江越秀外国語学院の地図編集担当者らとのオンラインによる会議が開かれ、具体的な事務内容と日程などについて協議している。結局、本会から最新の2021年９月段階の日本禹王遺跡分布図と遺跡データを提供することになった。以上の交渉は植村と竹内がおこなった。そして、2022年４月には中国禹跡図とともに日本禹王遺跡図・韓国禹王遺跡図および『日韓禹跡考釈』が完成、出版されたのである[13]。富士川サミットから約５年間で東アジアの禹王遺跡分布図を完成させた。その迅速性と実行力に敬意を表したい。

３．中国禹跡図の判読と特徴

1）中国禹跡図の記載

本図には20省、１自治区、４直轄市、１特別行政区の計26地区から323件の禹跡を取り上げ、14類型ごとの記号により位置と禹跡名を記載している。一覧表では地区別に区分し、左から右へ全国番号、地区番号、禹跡名、地理位置、流域、類別、年代、現状、出典、注の順に記す（表１）。このうち、国家重点文物保護31件、省文物保護27件、県文物保護11件総計69件が含まれ全体の21% に達する。

表１　中国禹跡一覧表（2022年版）部分

地区		全国編号	地区編号	禹迹名	地理位置	所属流域	类别	起源年代	现状	出处	备注
安徽	蚌埠市	109	皖４	禹王宫	安徽省蚌埠市禹会区涂山风景区	淮河	古建筑・宫	汉	现存	调研	
		110	皖５	启母石	安徽省蚌埠市禹会区涂山风景区	淮河	山川・石	古代	现存	调研	
		111	皖６	防风冢	安徽省蚌埠市禹会区涂山风景区	淮河	古遗址	古代	不存	调研	
		112	皖７	禹会村遗址	安徽省蚌埠市禹会区秦集镇禹会村	淮河	古遗址	新石器时代晚期	国保	调研	
		113	皖８	禹帝庙	安徽省蚌埠市禹会区天河社区禹庙村刘巷自然村	淮河	古建筑・庙	明	现存	《中国文物地图集》	
		114	皖９	大禹庙	安徽省蚌埠市固镇县连城镇禹庙村	淮河	古建筑・庙	清	现存	《中国文物地图集》	
福建	泉州市	115	闽１	平水宙巷	福建省泉州市鲤城区开元街道开元社区	东南沿海	地名	唐	现存	调研	早期建有平水庙，祀禹
江西	九江市	116	赣１	禹王台	江西省九江市湖口县鄱阳湖	长江	古建筑・台	南北朝	现存	调研	在鞋山岛
		117	赣２	大禹勒石刻碑摩崖	江西省九江市庐山市庐山紫霄峰	长江	石刻	先秦	现存	调研	
	抚州市	118	赣３	尧山庙	江西省抚州市临川区高坪镇尧山村	长江	古建筑・庙	清		清《江西通志》	祀尧舜禹
	鄱阳湖	119	赣４	彭蠡	江西省鄱阳湖	长江	山川・湖	先秦	现存	《禹贡》	“彭蠡既猪，阳鸟攸居”
山东	济南市	120	鲁１	原山庙禹王殿	山东省济南市莱芜区和庄镇北平洲村	黄河	古建筑・殿	清	现存	《新修莱芜市志》	
		121	鲁２	三德范玄帝阁禹王庙	山东省济南市章丘区文祖街道三德范庄村	山东半岛	古建筑・庙	明清	省保	调研	
	淄博市	122	鲁３	禹王庙	山东省淄博市淄川区城南镇苏王庄禹王山	山东半岛	古建筑・庙	明	市县保	《中国文物地图集》	有禹王祠遗址
	潍坊市	123	鲁４	禹王台庙字群	山东省潍坊市寒亭区高里街道	山东半岛	古建筑・台	古代	省保	调研	有禹王台遗址
	济宁市	124	鲁５	嘉祥武氏墓群石刻	山东省济宁市嘉祥县武氏墓群石刻博物馆	淮河	画像石	东汉	国保	《鲁迅藏拓本全集》	有尧舜禹等古帝王像十图
		125	鲁６	龙王庙禹王殿	山东省济宁市汶上县南旺镇	淮河	古建筑・殿	明	现存	《中国文物地图集》	
	泰安市	126	鲁７	泰山三官庙	山东省泰安市泰山区泰山中麓斗母宫	黄河	古建筑・庙	古代	现存	调研	供奉天、地、水三官
		127	鲁８	禹王庙	山东省泰安市宁阳县伏山镇堌城坝村	黄河	古建筑・庙	明	省保	调研	有省级非遗“大禹传说”等
		128	鲁９	大野泽	山东省泰安市东平县	黄河	山川・泽	先秦	现存	《禹贡》	“大野既猪，东原底平”
	日照市	129	鲁10	日照会稽山	山东省日照市东港区北部与五莲县交界处	山东半岛	山川・山	古代	现存	钱穆《先秦诸子系年》	又名小会稽山
	临沂市	130	鲁11	郯国古城遗址	山东省临沂市兰山区柳青街道南坊村古城村	淮河	古遗址	周	遗迹	《左传》	传大禹后代受封于“郯国”
		131	鲁12	禹王城村	山东省临沂市河东区梅家埠街道禹王城村	淮河	地名	古代	现存	调研	
	德州市	132	鲁13	禹城	山东省德州市禹城市	海河	地名	古代	现存	调研	
		133	鲁14	禹王亭	山东省德州市禹城市十里望回族镇十里望村	海河	古建筑・亭	龙山时期	省保	《九州方圆话大禹》	在具丘上
	聊城市	134	鲁15	禹堤遗迹	山东省聊城市茌平县、济南市长清区、德州市禹城市	海河	古遗址	古代	遗迹	调研	禹城市张庄镇黎济寨村有遗存
	滨州市	135	鲁16	徒骇河	源自河南省濮阳市，流经河北省，山东省滨州市入渤海	海河	山川・河	明	现存	《尔雅》	禹疏九河之一。今河始于明
		136	鲁17	无棣碣石山	山东省滨州市无棣县碣石山镇大山村	海河	山川・山	唐	现存	清《肇域志》	有碣石山门、禹王亭
		137	鲁18	马颊河	源自河南省濮阳市，流经河北省，山东省滨州市入渤海	海河	山川・河	唐	现存	《尔雅》	禹疏九河之一。今河始于唐
	菏泽市	138	鲁19	三官庙	山东省菏泽市高新区马岭岗镇李朝花村	淮河	古建筑・庙	明	现存	清《重修三官神祠碑记》	碑文称“尧舜禹三官神祠”

2）禹跡の類型

類型は禹跡の形態を14種類に分類している。そのうち上位１～９位の名称と件数、主な分布地区（省、市などを略す）と件数順を統計表から要約して示す（図２）。

１寺廟　126件：①四川20件、②浙江19件、③山西16件、④河南13件、⑤重慶12件

２山嶺　58件：①浙江11件、②四川10件、③河南８件、④甘粛７件、⑤山西５件

３古遺跡　30件：①甘粛６件、②江蘇・四川各４件、④湖南３件

４地名　26件：①四川７件、②山西５件、③浙江・河南各３件

５河湖　24件：①四川５件、②山東・河南各３件

６石・洞　17件：①浙江４件、②四川３件、③河南・陝西各２件

７可移動物　13件：①北京４件

８石刻　10件：①四川４件

９陵墓　８件：①河南２件

寺廟が最多で、39％と約４割を占める。名称は廟、寺のほか宮、殿、祠、閣、台などとよばれている。ほぼ全地区で最多数を占めており、治水神や治水英雄、夏聖王などとして中国各地で大禹の信仰や崇敬が浸透していること、現在でも大禹文化が維持されていることを示す。文化大革命により多数の寺廟が破壊されたといわれる。しかし、四川、浙江、山西、河南、重慶の上位５地区は寺廟の集中が著しく、大禹文化が強く浸透、維持されている地区であるといえよう。ついで山嶺が18％と多数を占めるのは驚きである。これには禹を冠する山名のほか、禹にまつわる伝説、伝承をもつ山が多く含まれる。同じことが河湖の７％にも当てはまる。長い歴史のなかで大禹の存在や信仰が日常生活の身近にある山や湖、川など自然物に仮託されてきたことの反映であろう。さらに禹の名を冠する村名や自然物の地名は８％を占める。そこで山嶺、河湖、地名を禹王地名として一括すると総計108件、33％に達し、寺廟の39％についで第２位を占める。これらの年代として夏代、先秦期されるものが多い。一方、日本では地

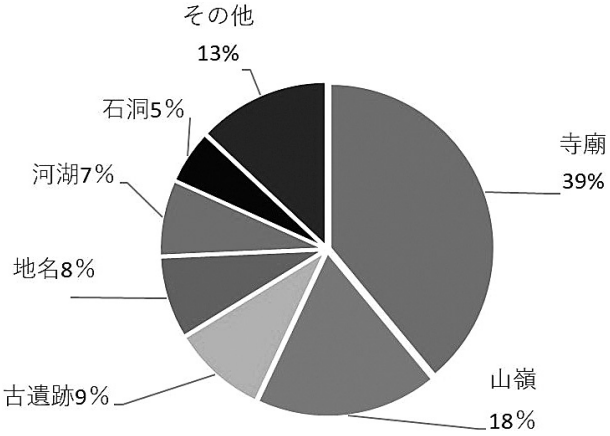


図２　遺跡形態の比率

写真１　故宮博物院の大禹治水図玉山(故宮博物院)

名として禹父山（福島県)、禹余糧山（岡山県)、禹之瀬（山梨県）の３件のみにすぎず、事情が大きく異なる。古遺跡とは禹名を冠する遺跡のほか、失われてしまった廟や石碑、記念物の位置などをさす。また、可移動物とは彫刻、青銅器、絵画などをさし北京の国家博物館や故宮博物院に所蔵されている名品が多い。なかでも故宮博物院蔵の「大禹治水図玉山」は高さ224cm、重さ５トンの玉製彫刻である（写真１)。

一方、石刻（碑を含む）が10件、３％と非常に少ないのは意外である。日本では石碑・銘板が遺跡全体の約７割と圧倒的多数を占めているのと大きく異なる。禹王を顕彰の比喩やレトリックとして碑文に刻み、半永久的な記念物として石碑を建てる文化が定着しているのに対して、中国では現在も生きた信仰や崇敬の対象であり、石碑に刻む伝統や慣習が定着していないのだろう。陵墓が浙江省のほか河南省にも所在する。また、吉林省通化市集安市の高句麗王城跡・王陵が記され、禹山に墓区が存在する[(14)]。集安市には啓母石、涂山など東北３省で唯一、４件の禹跡が分布することや高句麗への禹王文化の影響が注目される。

以上を通覧して以下のような問題点を感じた。①紹興市の大禹陵景区には会稽山、大禹陵、禹陵村、禹河の４件が記載されているにすぎない。大禹廟（大殿）や神位を祀る亨殿、大禹陵碑、禹祠、禹井、禹穴、岣嶁碑、告祭碑など多種の石碑などよく知られた多くの禹跡は大禹陵として一括されている。煩雑になるためか個々の禹跡は記載されておらず利用上注意を要する。②浙江禹跡図（2019）において記載された209件の禹跡のうち、本図の浙江省ではその約２割にあたる44件のみが取り上げられているにすぎない。いかなる基準により取捨選択が行われたのか理解できない。③日本の群馬県片品村と宮城県加美町にも存在する岣嶁碑として湖南省長

沙市岳麓山のものだけが取り上げられた。植村（2020）は16件の中国岣嶁碑の位置と設置年を示した[15]。これらは16世紀以降に大禹治水の顕彰のため歴史都市に設置されたものである。一方、原碑とされる湖南省衡山の岣嶁碑は越国期（紀元前456年）の山岳祭祀のためのものだとする説がある[16]。岣嶁碑が大禹治水に関わるものか不明なため除外されたのであろうか。④山西省夏県禹王村禹王城遺跡の禹王廟（写真２）、同省河津県禹門口の禹王廟跡に河津博物館の記念碑がある。こうした地方の禹跡に至っては膨大な数に達すると予想され、今回の調査では収録されていない。⑤治水事業の故地や観光地などに巨大な禹王像が設置されている。黄河では壺口、三門峡市（写真３）、鄭州黄河風景区、また紹興市内の各所などで観察され芸術

写真２　山西省運城市夏県禹王城遺跡と禹王廟（2011年10月）

写真３　河南省三門峡市三門峡ダムの大禹像（2011年10月）

品として優れたものも多い。しかし、これらの設置はほとんどが1980年代以降と新しく、歴史的価値を持つ禹跡としては取り上げられていない。⑥紹興市大禹陵景区には2020年に禹跡館に代わる新たな大禹記念館が建設された。四川省汶川県では2008年大震災後の復興シンボルとして大禹祭壇が、同省綿陽市北川羌族区に大禹博物館も設置されている。湖北省武漢市の晴川閣には大禹文化博物館があり、河南省鄭州市の黄河博物館は大禹治水と文化に関する展示が充実している。これら記念館や博物館は今後の調査研究の基地となり、現代の大禹文化を考察するうえでも重要な役割を果たすと予想される。以上指摘した点を考慮して改善、増補作業をおこない、今後より正確で詳細な中国禹跡図と遺跡一覧表が公表されることを望みたい。

3）地区別分布

上述の26地区ごとの禹跡分布を図３に示した。チベットや新疆ウイグル自治区、海南（以下省を略す）を除くほぼ全土に分布する。大局的には北高南低傾向が明瞭であり、黄河流域に最も密で長江さらに華南へと分布数は減少していく。とくに福建、広東、広西などで少なく、東北の３省にもほとんどない。流域ごとにみると、黄河流域に集中し上流の甘粛から陝西、中流

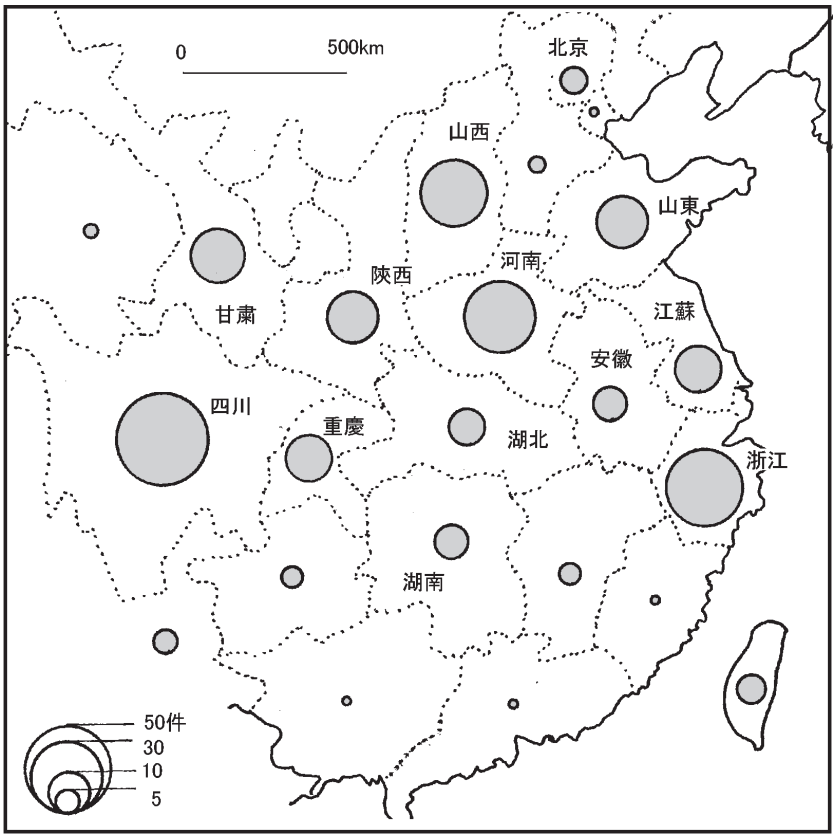


図３　省・区・直轄市ごとの遺跡分布

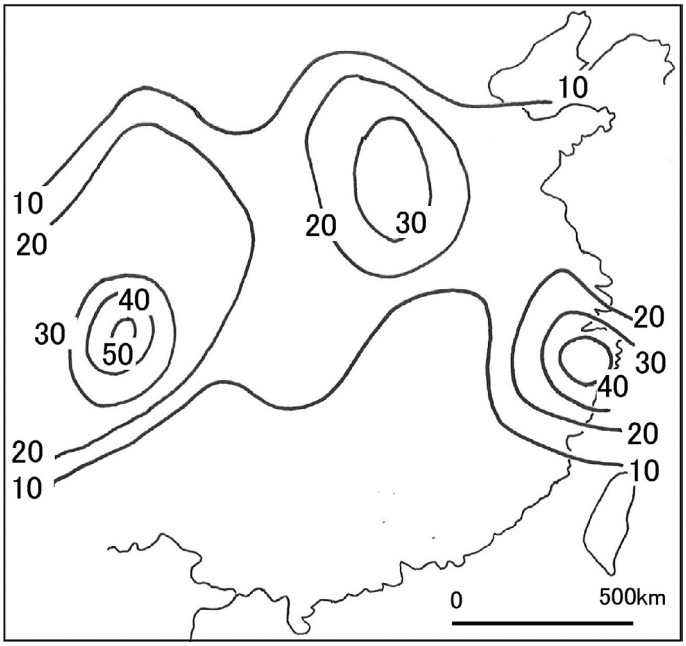


図４　禹跡の等密度線図（10件ごとに示す）

の河南と山西にかけて最も濃密で、最下流の山東まで連続する。一方、長江の分布は黄河の半数以下になるが上流から下流まで分布する。つぎに、地区ごとの分布数から10件ごとの等密度線を内挿法により描いた。図４によれば黄河および長江流域を軸として上流から下流へ東西に長く10件以上の地区が分布する。これは大禹が漢民族の文化であり、両河川が大禹文化の中心地区を形成していることを示す。さらに、四川、河南・山西、浙江の３大集中地区の存在がきわだつ。これに対して、北と南へ急減しており、とくに華南地域に少ない理由が注目される。福建省に多く存在する大禹を主神とする水仙廟（宮）を取り上げていない点も指摘されよう。

以下に上位15地区の禹跡数および地区内の集中地と件数を記す。また、図５に全体比を示す。

１．四川省　55件：①アバ蔵族羌族33件、②綿陽市北川羌族８件、③成都市５件
２．浙江省　44件：①紹興市21件，②台州市６件、③麗水市４件
３．河南省　36件：①登封市14件、②洛陽市６件、③南陽市４件、④許昌市・三門峡市各３件
４．山西省　30件：①運城市12件、②長治市９件、③臨汾市４件
５．甘粛省　20件：①臨夏州７件、②定西市３件
６．山東省　19件：①泰安市３件、①浜州市３件
６．陝西省　19件：①安康市５件、①渭南市５件、③西安市４
８．江蘇省　16件：①蘇州市６件、②淮安市４件
９．重慶市　15件：①湔中区２件、①南岸区２件
10．湖北省　10件、11．湖南省　９件、11．安徽省　９件、13．台湾省　７件、

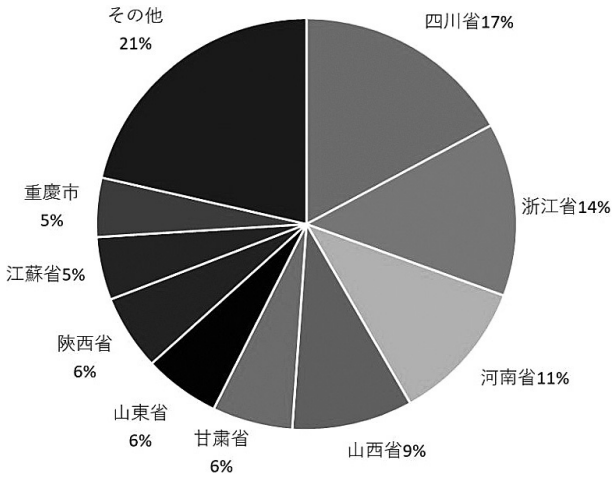


図５　省・区・直轄市ごとの遺跡比率

14. 北京市　６件、15. 雲南省　５件

このうち30件以上の禹跡をもつ四川、浙江、河南、山西の上位４省は５位以下の甘粛20件、６位の山東・陝西の各19件を引き離して断然多い。また、地区内に広く分布せず、核となる集中地区が存在している。その集中地と省内の占有率、地名を以下に示す。

①四川省：アバ蔵族羌族自治州33件（60%）：汶川県23件、綿陽市北川羌族自治県８件、

②浙江省：紹興市21件（48%）、越城区６件、柯桥区６件、新昌県５件、

③河南省：登封市14件（39%）、少林街道５件、

④山西省：運城市12件（40%）、夏県５件、長治市平川夏県５件。

いずれの地区も省内の約４割以上を占め濃密な分布を示す。また、上位３地区は黄河沿いに位置する。これについで、15件以上をもつ甘粛、山東、陝西、江蘇、重慶市が第２の集中グループをなしている。また、甘粛省臨夏州回族自治州７件（35%）、江蘇省蘇州市６件（37%）、安徽省蚌埠市７件（78%）などに集中地点が存在する。

4）年代

323件の禹跡を成立年代別に整理した。その結果（図６）から以下の点が指摘できる。

①古代から清代までの全期間にわたって遺跡が存在する。とくに、先秦期・秦期が168件、（52%）と約半数を占めて最多である。しかし、禹の治水や夏王に関する事績は当時の文字が存在せず、千年以上後の春秋期以降に伝聞をもとに古典籍などに記述された内容だ。

②ついで明33件（10%）、清56件（17%）と合わせて27%を占める。すなわち明代・清代が第２の設置集中期である。明・清期において中華文化の復興と大禹事績に対する顕彰がすすみ、多くの寺廟などが建立されている。また、明代には黄河の氾濫と決壊が多発し治水や築堤事業に関心が向けられたこと、明中期の文人楊慎らが大禹治水や岣嶁碑の価値を普及させたこ

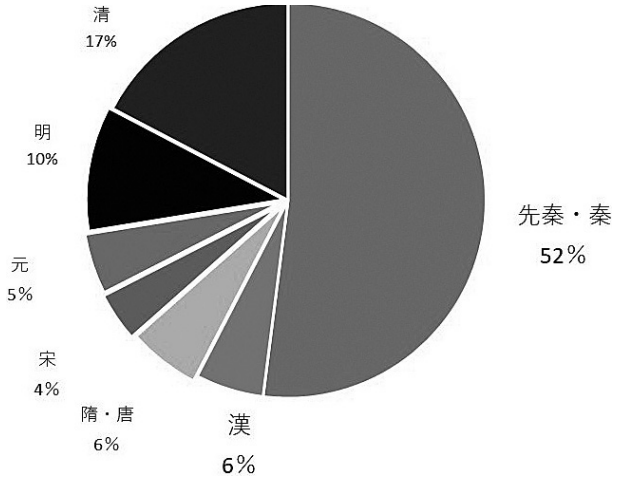


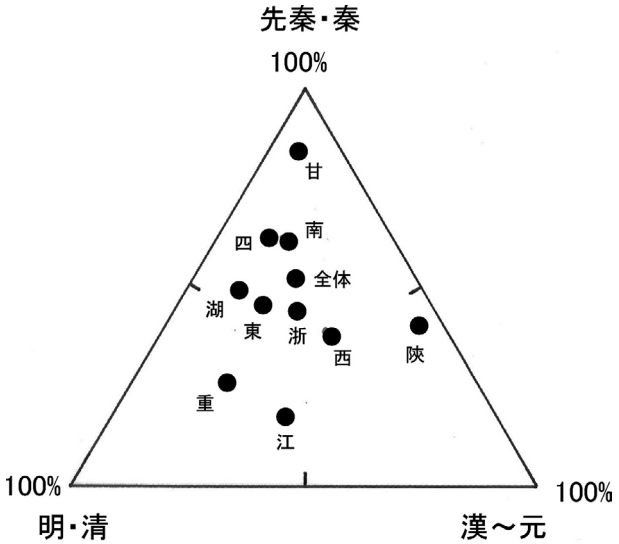
図６　年代ごとの遺跡比率

ともこれに貢献した。

③中華民国期の禹跡として山西省運城市の運城禹王閣が１件のみ記載される。1912年の中華民国建国以降の大禹治水や文化、信仰の位置づけについて今後の課題であろう。

④後秦～前明代の長い空白期が存在するが、漢代や隋唐代、元、宋の時代においても禹跡が継続的に設置されている。断絶期があるようにはみえない。

⑤年代を先秦・秦期、漢～元、明・清の３時期に大別し、10件以上を有する10地区を図７のグ



甘：甘粛省、南：河南省、四：四川省、湖：湖北省、東：山東省
浙：浙江省、西：山西省、陝：陝西省、重：重慶市、江：江蘇省

図７　三時代区分による比較

ラフで比較してみた。その結果、次のような特徴が指摘できる。①全体平均では秦・それ以前が５割、漢～元および明・清が各々２～３割を占める。②秦・それ以前が６割以上を占めるのは甘粛、河南、四川の３地区である。③漢～元期の比重が大きいのは陝西と山西である。④明・清代が４割以上を占めるのは重慶、江蘇、湖北の３地区である。以上、②～④にみられる時代ごとの特徴は地域の歴史性や王朝の変遷を強く反映したものと思われ、その要因について今後検討したい。

４．ライフサイクルによる大禹文化遺跡の分類

刘家思主編は大禹文化遺跡をライフサイクルにより５分類している[17]。これは刘訓貨主編による提案を改良した内容である[18]。この分類は大禹伝説の発祥地であり、生誕から死去までの生涯を全うした中国独自のユニークな分類基準である。刘家思主編では1）出生、2）婚姻、3）立国、4）治水功績、5）墓葬の５区分しており、これらを順にＢ、Ｍ、Ｎ、Ｗ、Ｄと略称する。つぎに刘家思主編から遺跡を抽出し、分布地を検討してみよう（図８）。

1）出生遺跡（Ｂ）４件：①河南省登封市祖家庄（写真４）、②四川省北川チャン族自治区石紐、③四川省汶川県綿虒鎮刳坪、④河南省禹州市石紐村

2）婚姻遺跡（Ｍ）７件：①浙江省紹興市禹陵郷涂山、②同省安昌鎮西扆山（写真5）、③重慶市南岸区南山、④河南省嵩県山涂山、⑤同県登封市嵩山、⑥山西省夏県青台、⑦安徽省巣湖市

3）立国遺跡（Ｎ）５件：①浙江省紹興市会稽山、②安徽省蚌埠禹会区禹墟、③河南省登封市告成鎮陽城、④河南省禹州市陽翟、⑤山西省夏県安邑禹王城

4）治水功績遺跡（Ｗ）52件：流域ごとに整理すると、①黄河18件、②済水６件、③淮河11件、④長江８件、⑤その他10件となる。これらすべてを示すと煩雑すぎるため、位置が特定できた26件のみを示す。

5）墓葬遺跡（Ｄ）１件：①浙江省紹興市大禹陵景区

写真４　河南省登封市祖家荘の石紐石（2013年10月）

写真５　浙江省紹興市安昌鎮の西扆山（2018年４月）

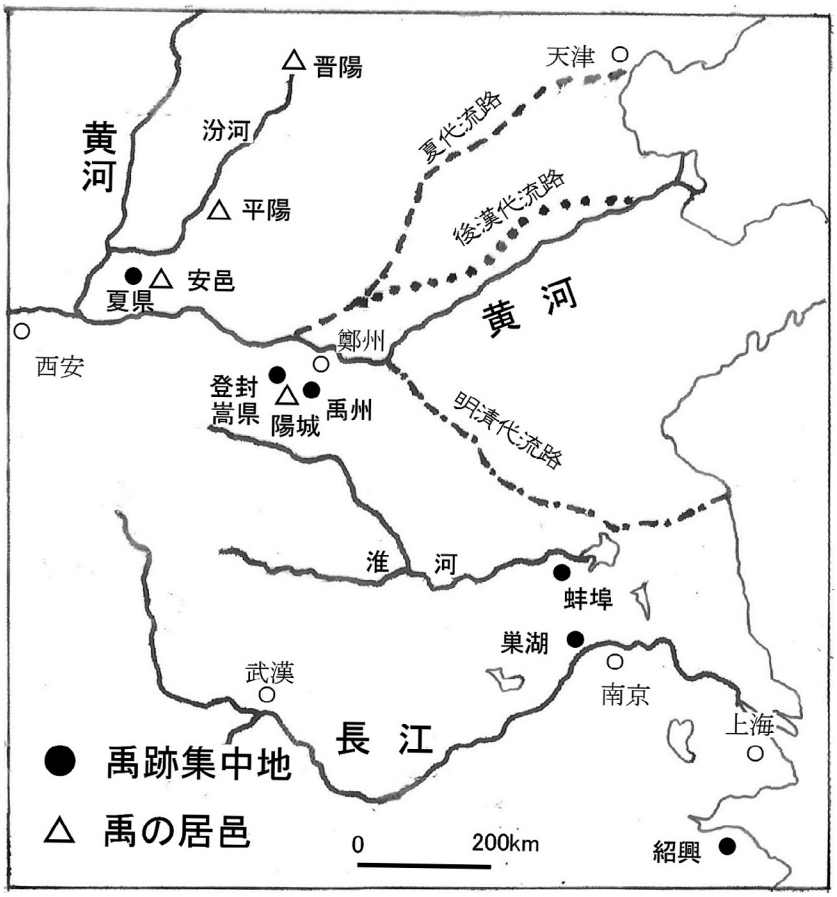


図８　ライフサイクルに関する概念図

以上の分布を図９に示した。Ｂは河南省と四川省に各々２件みられる。Ｍは浙江省および河南省、安徽省に各々２件および山西省にある。Ｗに関わるものが52件あり、約半数の42%が黄河流域、についで約25%が淮河流域に分布する。一方、長江流域では８件（19%）にすぎず済水６件（14%）がこれに次ぐ。ＮおよびＭは同じ浙江省、河南省、山西省と安徽省にみられる。Ｄは浙江省紹興市大禹陵地区のみに存在する。重要な点は、黄河中流のいわゆる漢族の故里、中原地区（山西南部・河南北部）に最大の集中地区がみられることである。ここは華夏部族の発祥、中心地で夏国の立国の地でもある。当時の居邑（王都）と伝えられる陽城や安邑（禹王城）、平陽などもここに位置する。発掘調査により二里頭や王城崗遺跡から同時代の都城跡も確認されている[19]。こうした分布は禹王の治水事績の伝承が中原地区で生まれ、黄河流域の上下流へ、さらに南方の長江流域へ流布していたことを裏づける。しかし、禹王治水の伝承が越国で創作され、中原、黄河流域へ広まったとする梁・張（1998）の説[20]には賛成できない。

つぎに、浙江省紹興市における集中が著しい。ここは禹王が埋葬された地であり大禹陵が存

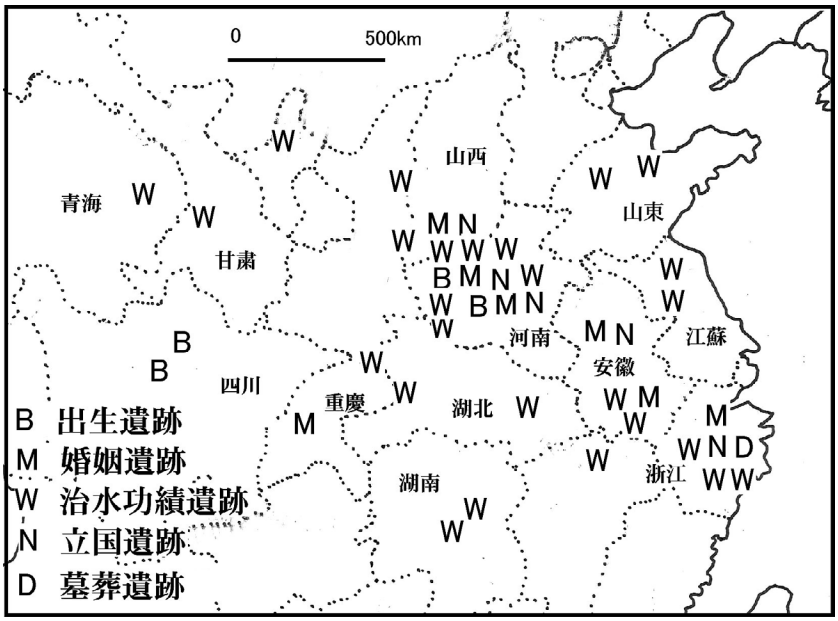


図９　ライフサイクルによる省・区・直轄市ごとの禹跡分布図

在する。陵は禹の子・啓が創始し始皇帝は会稽山において禹王祭祀を執行し石碑を建てたという。また、越王勾践は夏王六代少康の庶子であり、越国は禹の末裔であると主張する。その血統を禹王と夏王朝に結びつけ祭祀することで王権の正当性を主張したのである[21]。こうして、生誕以外のすべての大禹伝承が生まれ流布したのだと推定される[22]。また、安徽省蚌埠市の集中が注目され、多様な遺跡が分布する。以上の上位３地区はサイクルの１～４に関わる遺跡を複合的に有している点で共通する。一方、四川では出生に関する遺跡のみが分布し極めて特異である。

５．日本の禹王遺跡との比較

1）類型　日本では石碑や銘板が71％と圧倒的多数を占める。これは禹王を顕彰や賛辞の比喩、レトリックとして利用、半永久的な記念物として保存されるものが多い。これに対し、中国では寺廟が39％、山や川など地名類が33％を占めており、信仰の対象や生活空間の自然物の名称などとなっている点で対照的である。両国における禹王文化の特徴を反映しているといえよう。

2）地区別分布　関東の利根川や酒匂川、中部の揖斐川、近畿の淀川など古くから開発が進みかつ水害常襲地をかかえる流域に集中する。中国では水害を頻発してきた黄河や長江流域に多い点で共通する。一方、生誕伝承をもつ四川省や埋葬地の浙江省に多数存在しており、両地区は特異な文化を有することが推定される。

3）年代　京都鴨川に1228年に建てられた洪水鎮静のための夏禹廟（伝承）や1488年旧五条橋下の夏禹廟は現存しない。その後、禹王信仰が地方に伝播した記録はみられず断絶したようにみえる。この背景について明らかにする必要がある。一方、徳川政権安定のため重視された儒教儒学の普及にともなって17世紀以後全国的に遺跡が増加していく。江戸期のものが46%に対して明治以降は51% とほぼ二分される。とくに、昭和後期（1946年以降）10%、平成期15% と新たな遺跡は増加し続けている点が注目される。中国では秦およびそれ以前が52%、明・清期に27% を占め、以後はほぼ断絶している点で対照的である。

6．まとめ

1）2022年４月に出版された「中国禹跡図2022年版」は全国26地区の禹跡323件を示した唯一・最新の禹王遺跡分布図である。その図式は治水神・禹王研究会が発行した日本禹王遺跡分布図を参考に、紹興市鑑湖研究会が中心となり編集し紹興市から発行された。323件の禹跡を地区別に分類し、全国番号、地区番号、遺跡名、地理位置、流域、類別、年代、現状、出典、注の順に記載したもので、信頼性の高い地図情報である。

2）禹跡の類型として寺廟が最多で39% と約４割を占める。次いで山嶺の18%、禹地名８％および河湖の７％が続き、これらを地名として一括すると33% にも達する。寺廟と地名の両者で72% と圧倒的多数を占める。これに対して、石碑類は３％にすぎず、日本の約７割を占める状況と大きく異なる。

3）遺跡数からみると黄河と長江流域を軸として東西に10件以上の帯状地区が存在する。さらに、四川地区、河南・山西地区、浙江地区の３大集中地区の存在により特徴づけられる。これは大禹が漢民族の文化であり、両水系の水神、治水神、聖王として中核地域を形成していることを示す。

4）遺跡の年代では、先秦・秦期のものが52% を占め、ついで明・清代のものが26% を占める。この２時期が遺跡設置の集中期である。

5）ライフサイクルによる出生、婚姻、立国、治水、墓葬の５分類によりそれらの分布を検討した。治水は黄河および長江のほぼ全域に見られる。一方、出生は四川と河南、婚姻は浙江、河南、重慶、立国は浙江、安徽、河南、山西、埋葬は浙江のみに分布する。河南・山西および浙江省は治水のほか婚姻、立国の遺跡が複合する集中地区を形成している。

謝辞

2017年10月の富士川サミット以来親しく交流を続け、大禹陵典礼や国際学術会議への招待、地方調査時に親身に援助いただいた紹興市鑑湖研究会長邱志栄先生、浙江越秀外国語学院の劉家思先生には心より感謝申し上げます。紹興市の禹跡図編集担当者、日中文化交流に献身的に

尽力くださった呉鑑萍さんと張鈞徳氏、中国との交渉と通訳に当って下さった竹内晶子さん（治水神・禹王研究会事務局長）に心からの謝意を表します。

〔注〕

（１）紹興市鑑湖研究会主編（2022）「中国禹跡図2022年版」、紹興市文化広電旅游局発行

（２）治水神・禹王研究会編（2022）「日本禹王遺跡分布図2022年版」
植村善博・関口康弘・大邑潤三（2023）『日本禹王事典』、古今書院、343p

（３）日本では禹王、禹王遺跡などとよぶ。以下では一般名称として禹王を用いる。これに対し、中国独自のものに対して大禹、禹跡などと呼んで区別する。

（４）紹興市文化広電旅遊局・紹興市鑑湖研究会（2022）『禹跡図編制導則』11p
竹内晶子（2023）中国・紹興市と治水神・禹王研究会との交流―中国における「禹跡図」誕生の契機―、治水神・禹王研究会誌、10，37～47

（５）中国禹跡図（2022年版）編制説明、竹内晶子による翻訳文による

（６）中共紹興市委宣伝部・紹興市鑑湖研究会編制（2018）「紹興禹跡図」、紹興市鑑湖研究会・紹興市大禹陵景区編制（2019）「浙江禹跡図」、何俊杰・邱志栄・張　東（2021）『紹興禹跡標識導読』、中国文史出版社、371p

（７）邱志栄・呉鑑萍・竹内晶子（2018）中国「禹跡行」訪日団の「第６回全国禹王サミット」参加記、治水神・禹王研究会誌、５，25～29

（８）竹内晶子（2023）中国・紹興市と治水神・禹王研究会との交流―中国における「禹跡図」誕生の契機―、治水神・禹王研究会誌、10，37～47

（９）邱志栄・張金徳・金小軍主編（2019）『浙江禹跡図』、中国文史出版社、255p

（10）竹内晶子（2019）紹興市再訪と中日大禹文化国際シンポジウム、治水神・禹王研究会誌、６，29～32

（11）竹内晶子・呉鑑萍（2023）四川省における大禹文化の伝承―アバ・チベット族チャン族自治州汶川県を例に―、治水神・禹王研究会誌、10，26～36、
竹内晶子（2023）中国・紹興市と治水神・禹王研究会との交流―中国における「禹跡図」誕生の契機―、治水神・禹王研究会誌、10，37～47

（12）邱志栄・呉鑑萍・竹内晶子（2021）禹王誕生地・四川省汶川県と『汶川禹跡図』完成をめぐって、治水神・禹王研究会誌、８，19～39

（13）紹興市文化広電旅遊局・浙江越秀外国語学院絵制（2022）「日本禹王遺跡図」、「韓国禹王遺跡図」、李相銀編（2022）『日韓禹跡図考釈』、紹興市文化広電旅遊局・浙江越秀外国語学院、131p

（14）吉林省文物考古研究所・集安市博物館（2004）『集安高句麗王陵、1990―2000集安高句麗王陵調査報告』、399p

（15）植村善博（2020）湖南省の禹王遺跡および岣嶁碑調査、治水神・禹王研究会誌、７，２～９

（16）周曙光（2014）『呉越歴史與考古論集』における岣嶁碑の研究、治水神・禹王研究会誌、創刊号、39～47、
曹錦炎（2007）岣嶁碑研究、『呉越歴史與考古論集』、120～138，文物出版社

（17）刈家思主編（2020）大禹文化遺跡、『大禹文化学導論』、安徽文芸出版社、210～237
竹内晶子訳（2022）『大禹文化学導論』（劉家思主編）第８章（中国における禹王遺跡）、治水神・禹王研究会誌、９，18～42

（18）刈訓貨主編42012）大禹古跡研究、『大禹文化学概論』，武漢大学出版社，84～101

（19）岡村秀典（2003）『夏王朝　王権誕生の考古学』、講談社、249p、
稲畑耕一郎監修（2016）『北京大学版中国の文明１　古代文明の誕生と展開（上）』、潮出版社

（20）梁継国・張愛萍（1998）「大禹治水」より「土母治水」へ―中日洪水神話に関する比較研究、茨城大学人文学部紀要、３，83～104

（21）岡村秀典（2003）『夏王朝　王権誕生の考古学』、講談社、249p
（22）植村善博（2019）紹興市の禹王遺跡訪問記録、治水神・禹王研究会誌、６，38～41

（うえむら　よしひろ　佛教大学名誉教授）

2023年11月９日受理